

少子・高齢化社会に対応した公園緑地基準の検討

The examination of the park and open space standard
corresponding to declining birthrate and aging

(研究期間 平成 14～17 年度)

環境研究部 緑化生態研究室
Environment Department
Landscape and Ecology Division

室長 松江 正彦
Head Masahiko MATSUE
研究員 長濱 庸介
Research Engineer Yosuke NAGAHAMA

It is said that the activity of a child's mind and body is falling rapidly. It is considered as a cause that many problems in connection with growth environment, such as aggravation of play environment, loss of natural experience, and a physical strength fall, are aggravating this with social change, such as urbanization, natural destruction, and a decrease in the birthrate. Although a city park is considered that the role which came for mind-and-body activation sure enough as a child's familiar playground is large, the state of the park based on the above social situations fully needs to be examined. Then, it inquires for the purpose of performing grasp and analysis of the use actual conditions, such as a basic park for neighborhood a child's familiar playground, and performing arrangement of the park for a child, and the proposal of an institution indicator.

〔研究目的及び経緯〕

子どもの心身の活性が急激に低下しつつあるといわれている。これは、都市化や自然破壊、少子化などの社会的変化に伴い、遊び環境の悪化や自然体験の喪失など、生育環境に関わる諸問題が深刻化していることに起因すると考えられる。都市公園が子どもの身近な遊び場として心身活性化に果たしてきた役割は大きいと考えられるが、今後は上記のような社会状況を踏まえた公園のあり方が十分に検討される必要がある。

本研究では、子どものための公園の配置、施設指針の提案を行うことを目的として、住区基幹公園の利用実態の把握・分析を実施した。

〔研究内容〕

都市部の調査地として杉並区立杉並第十小学校区域、地方都市部の調査地として茨城県つくば市の東小学校区域を選定し、各学区域内にある住区基幹公園の利用実態調査を実施した。また、ビオトープ的な整備がされている公園においても同様の調査を実施した。そして、調査結果を踏まえて、子どもの遊び場としての公園の現状について整理した。なお、本研究では、子どもたちを小学生以下と定義した。

〔調査内容〕

(1) 調査対象公園

調査対象公園は、杉並区立杉並第十小学校区域内に

ある6公園、つくば市立東小学校区域内にある8公園とした(図-1および表-1)。また、ビオトープ的な整備がされている公園として、世田谷区の岡本公園、横浜市の新井町公園を調査対象公園とした(表-1)。

(2) 調査内容

調査対象公園の利用実態を把握するため、入退園調査、活動内容調査、利用者追跡調査、アンケート調査を実施し、調査対象公園の利用実態を把握した。

〔調査結果と考察〕

調査結果を踏まえて、子どもの遊び場としての公園の現状について以下のように整理した。

(1) 子どもたちのコミュニティ形成の場としての公園

週2～3回以上の公園利用者をヘビーユーザーと考えた場合、平日の和田北公園では、子どもたちのヘビーユーザー率は80%程度と高い割合を示していた。さらに、公園へ来園した理由として「友達が集まるから」と回答した子どもが半数を占めていたことから、住区基幹公園が身近な遊び場として子どもたちに利用されているだけでなく、公園に行けば友達に会えるという事で、子どもたちのコミュニティ形成の場として重要な役割があるものと考えられた。

(2) 多様な遊びが可能な公園

ビオトープ的な整備がされた岡本公園や新井町公園では、ドングリ拾いやザリガニ釣りといった自然遊びや、遊具遊びの割合が高かった。利用者による各公園

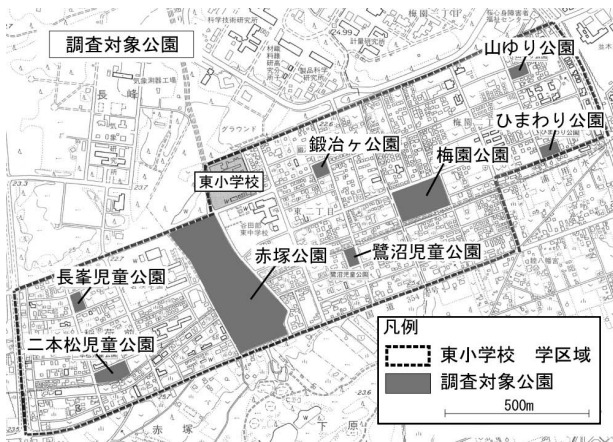
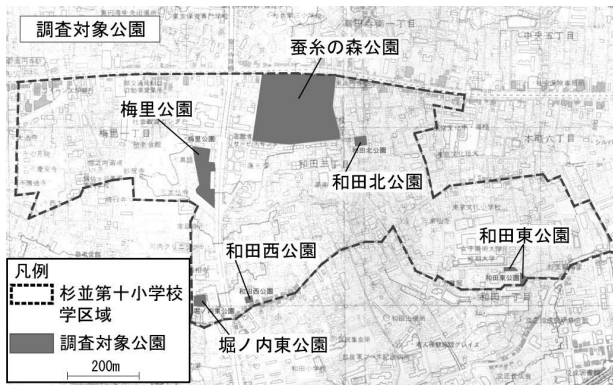


図-1 調査対象公園の位置

(上図：杉並第十小学校区域、下図：東小学校区域)

の評価を見ると「非常によい」、「良い」という意見が岡本公園と新井町公園で平均 82%程度と高い割合を示した。一方、都市部や地方都市部の近隣公園では平均 74%程度であった。以上から、自然遊びや遊具遊びなどといった、多様な遊びが子どもたちの満足度に繋がっている可能性が考えられた。

(3) 公園の安全性確保の必要性

街区公園のなかで利用者の多かった梅里公園や堀之内東公園では、公園を訪れた理由として「安全だから」という意見が平均 20%程度を占めていた。しかし、利用者の少ない街区公園では「安全だから」という意見が無い公園も見受けられ、一部の公園では「暗いため不安」という意見が挙げられていた。また、ビオトープ的な整備がなされた公園では「緑が多いのは良いが、鬱蒼として危険」、「死角を無くして欲しい」という意見が挙げられた。自然が豊かで多様な遊びが可能であり、公園としての評価が高い反面、それが危険な場所であるというイメージにも繋がっているものと考えられた。以上から、子どもたちが安心して遊べるよう、地域ぐるみによる公園の巡視やプレイリーダーの常駐など、子どもたちが安心して遊べるような対策を講じることが重要であると考えられた。

[まとめ]

本研究により子どもの遊び場としての公園の現状と課題点を抽出し、子どものための公園整備のあり方について示すことができた。

表-1 調査対象公園の概要

項目	杉並第十小学校区		東小学校区			ビオトープ的な整備がされた公園
	蚕糸の森公園	和田北公園 和田東公園 和田西公園 堀ノ内東公園 梅里公園	赤塚公園	梅園公園	山ゆり公園 ひまわり公園 鍛冶ヶ台公園 鷺沼児童公園 長峯児童公園 二本松児童公園	
種別	近隣公園	街区公園	地区公園	近隣公園	街区公園	近隣公園
面積	27,146 m ²	371 m ² ~ 5,621 m ²	86,000 m ²	20,085 m ²	2,257 m ² ~ 5,757 m ²	12,431 m ² (岡本公園) 19,187 m ² (新井町公園)
主な施設	池、流れ、トイレ 砂場、防火水槽 詰所	ベンチ、木製遊具 防火水槽、 ブランコ トイレ、砂場 すべり台、ベンチ 鉄棒、水飲み 球戯場、草地広場	郷土の森、 プロムナード 芝生広場、トイレ 流れ・池 花の森、野草の丘 駐車場	梅林広場 多目的運動広場 休憩舎、トイレ 集会所	芝生広場、砂場 ブランコ、鉄棒 シェルター すべり台 回転イス、 複合遊具	自然林、竹林 ホタル飼育場、 池・流れ ブランコ すべり台 木製遊具 アスレチック広場